

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案物語『裸麦の種子の由来』 —訳注と語りの特徴—

鈴木 博之 四郎翁姆
オスロ大学 オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、テキスト訳注、証拠性

1 はじめに

本稿は、チベット地域に伝わるとされている口承の物語『裸麦の種子の由来』のカムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案について言語学的訳注を施し、また語りの特徴を分析する。

物語『裸麦の種子の由来』は、チベット口承文学として外部には認知されており、出版物¹にも収録され、インターネット上にも物語のあらすじが公開されている²。しかしながら、Lhagang 方言の話される地域、すなわち中国四川省甘孜藏族自治州康定市塔公鎮塔公村では、まったく伝わっていない。筆者はチベット文化圏東部のさまざまな地点で同物語の存在を尋ねてみたが、語れる者はおろか、物語を聞いたことがある人にすらいまだかつて出会ったことがない。

本稿の試みは、まず第二著者である Lhagang 方言母語話者に、公開されている『裸麦の種子の由来』の物語のあらすじをいったん漢語で覚えてもらい、その記憶に基づいて、Lhagang 方言によって物語を語ってもらうという手法をとったことである。調査票を見ながらの聞き取りとも、自然発話とも異なる発話資料となるが、発話において、「情報へのアクセス方法 (access to information)」および「情報源 (source of information)」に代表される証拠性 (evidentiality) が重要な機能を果たすチベット系諸言語 (Tournadre & LaPolla 2014) において、半ば人工的に語られた比較的長い発話の中で、証拠性がどのように標示されるかは興味深い問題である。

上述のように、本稿で記述する Lhagang 方言版の『裸麦の種子の由来』は、既存の漢語版に基づく翻案である。現地には伝わっていない物語であり、既存の版の忠実な翻訳でもない。当地における民話などの語りが失われつつある中で、まとまった内容をもつ長編の語りをいかに再現できるかという視点からも、本稿の試みに一定の注目すべき点があると考えられる。

本稿での分析は、鈴木・四郎翁姆 (2016) の文法の記述を前提としつつ、訳注部分で逐次参照し、補足事項が認められる場合には指摘する。また、語りの構成の分析、内容の解釈に当たっては、鈴木ほか (2015) の分析を随時参考にする。なお、音表記については本稿末尾を参照。

¹ 賈芝・孫劍冰編 (1964)、君島 (2013) (日本語版) など。漢語の原典が存在するが、未見。ほかにも《藏族民間故事選》(1980) などに含まれている。

² たとえば、http://www.tibetculture.net/whbl/ystd/ywx/mjwx/200712/t20071212_299085.htm (西藏文化網) など。この版が語りのベースであるため、文中で言及する場合には「西藏文化網版」と呼ぶ。

2 テクストと語釈および翻訳

『裸麦の種子の由来』の語りは、その内容の展開によって、大きく6段落に分かれる。本節で提示する各文は、段落数と文数によって示す。たとえば、(3.5)は第3段落の第5文という意味である³。

なお、語釈においては、一貫してゼロ形態である絶対格の標示を行わない⁴。

2.1 語釈

- (1.1) ʼni ma ʼfi na fi na-la ʼfi dza: po ʼpu zə-tciʼ ʼjoʼ-reʼ
 むかしむかし-[位] 王子-[不定] [存]
 むかしむかし、王子がいました。
- (1.2) ʼkʰo ʼmi-la ʼʔa tsʰo ʼze:reʼ
 3 名前-[位] [人名] 言う-[判]
 彼は名前をアツォといいました。
- (1.3) ʼkʰo ʼŋkʰɛ: pa-tciʼ ʼji:reʼ
 3 賢い-[不定] [判]-[判]
 彼は賢い人でした。
- (1.4) ʼta rɔʼ ʼhpo: pa ʼtɕʰe ʼreʼ
 さらに 勇敢な [判]
 そして勇敢でもありました。
- (1.5) ʼhsã mba ʼja: mo-tciʼ ʼreʼ
 心 よい-[不定] [判]
 善良な心を持っている人でした。
- (1.6) ʼmə ʼtsʰɔ ma-la ʼza-fi dzu ʼraʼ-ʼfi go-gə ʼtɕʰe tə
 人 すべて-[位] 食べる-[名] 得る-[必]-[属] ために
 すべての人にとって食べ物が手に入るように、
- (1.7) ʼkʰo ʼŋduʼ gə ʼfi dza: po ʼzə kʰa ʼsʰō-ta ʼnɛ: gə ʼsʰa wu:te
 3 龍王 そば 去る-[接] 裸麦-[属] 種-[定]
 ʼh[ə-sʰa ʼsʰō-zə reʼ
 求める-[名] 去る-[過]
 彼は龍王のそばへ向かい、裸麦の種を求めに向かいました。

³ 段落内の文の切れ目は、必ずしも完全な文となっていない場合がある。非常に長い文になる例では、文中で区切りを設けている。また、逐次訳では、不自然な場合もあるが、それは意図して直訳としている部分である。繰り返しなどを省いた全体の訳文は2.2で提示する。

⁴ ゼロ形態となる位格と混同する可能性があるが、名詞句の役割については訳注で解説する。

- (2.1) 'te na ta ʔkʰo ʔfi ma: mi ʔnə ɕʰu-ze ʔ[hiʔ-nə ʔhta ʔfi go:-nə
 それから 3 戦士 二十-[概] 連れる-[接] 馬 乗る-[接]
 ʔsʰo-zə reʔ
 去る-[過]
 それから、彼は 20 人ほどの戦士を連れて、馬に乗って行きました。
- (2.2) 'rə ʔhtciʔ ʔkə tsa ʔhtciʔ ʔfi gɛ:-zə reʔ
 山 一 のち 一 越える-[過]
 山を 1 つまた 1 つと越えました。
- (2.3) ʔtɕʰu ʔhtciʔ ʔkə tsa ʔtɕʰu ʔmā bo-tciʔ ʔfi gɛ:-zə reʔ
 川 一 のち 川 多い-[不定] 渡る-[過]
 川を 1 つまた 1 つ、たくさんの川を越えました。
- (2.4) 'tə na ta ʔlā kʰa-la ʔkʰo-gə ʔfi maʔ ʔga re-tciʔ ʔtuʔ ʔdji:-gə
 それから 路上-[位] 3-[属] 戦士 いくらか-[不定] 毒蛇-[能]
 ʔsʰo htəʔ-nə ʔɕʰə-zə reʔ
 噛む-[接] 死ぬ-[過]
 それから、路上で彼の戦士たちの何人かは毒蛇に噛まれて死にました。
- (2.5) ʔga re-tciʔ ʔfi ba mo reʔ-gə ʔsʰo htəʔ-nə ʔza-zə reʔ
 いくらか-[不定] 野獣-[能] 噛む-[接] 食べる-[過]
 何人かは野獣に噛まれて食べられました。
- (2.6) ʔga re-tciʔ ʔta rəʔ ʔmə ʔfi guʔ-gə ʔsɛʔ-zə reʔ
 いくらか-[不定] また 野人-[能] 殺す-[過]
 何人かはまた野人に殺されました。
- (2.7) 'tə nə ta 'rə ʔfi gu ʔhtɕu ʔko: ʔfi gu ʔfi gɛ:-tsʰa:
 それから 山 九十九 越える-[達]
 それから、99 の山を越えました。
- (2.8) ʔtɕʰu ʔfi gu ʔhtɕu ʔko: ʔfi gu-tciʔ ʔfi gɛ:-tsʰa: ʔhkaʔ-la
 川 九十九-[不定] 越える-[達] 時-[位]
 99 の川をほとんど越えたとき、
- (2.9) 'tə nə ta ʔʔa tsʰo ʔkʰo 'rə: ʔhtciʔ ʔmə tsʰe ʔma-lu:-zə reʔ
 それから [人名] 3 自身 一 以外 [否]-残る-[過]
 それから、アツオ自身 1 人を除いて誰も残っていませんでした。

- (2.10) ʼtə nə ta ʼkʰo ʼrɔ: ʼtə meʔ tciʔ ʼma-hʰtɑʔ-nə ʼŋũ tɕʰõ
 それから 3 自身 少し [否]-恐れる-[接] 先へ
 ʼja ra ʼŋdɔ-zə reʔ
 上 行く-[過]
 それから、彼自身少しも恐れず先の方へ上へ行きました。
- (3.1) ʼtə na ta ʼŋdɔʔ gə ʰi dʒa: po-gə ʰi doʔ-sʰa ʰtseʔ ʰkɑʔ-la
 それから 龍王-[属] 住む-[名] 着く 時-[位]
 それから、龍王の住むところに着いたとき、
- (3.2) ʼŋdɔʔ gə ʰi dʒa: po-gə ʼʔa tsʰo-gə ʼzei-zə-gə ʼkʰo ʰnɛi-gə
 龍王-[能] [人名]-[能] 言う-[過]-[属] 3 裸麦-[属]
 ʼsʰa wu: ʼleɪ-sʰa ʼfiɔ: ʼzei-ʰi dʒu-tə ʼkʰo-la
 種 取る-[名] 来る 言う-[名]-[定] 3-[与]
 ʼkʰɛi ʼma-lei-zə reʔ
 承諾する [否]-[幹]-[過]
 龍王はアツオが言った裸麦の種を取りに来たと言ったことを承諾しませんでした。
- (3.3) ʼtə na ta ʼʔa tsʰo-gə ʼlo tʰɑʔ ʰmeʔ-nə
 それから [人名]-[属] 方法 [存/否]-[接]
 それから、アツオの方法がなくなって、
- (3.4) ʼtə na ta ʰi zə ʰi dɑʔ-la ʰroʔ pa ʰi zo-roʔ ʰzei-zə reʔ
 それから 山神-[与] 助ける-[依頼] 言う-[過]
 それから、山神に「助けてください」言いました。
- (3.5) ʼtə na ta ʰi zə ʰi dɑʔ-gə ʰroʔ pa ʰi zo-nə
 それから 山神-[能] 助ける-[接]
 それから、山神が助けて、
- (3.6) ʼʔa tsʰo-gə ʼŋdɔʔ gə ʰi dʒa: po-tə ʰnõ-la ʰnɛi-gə ʼsʰa wu: tə ʰkui-zə reʔ
 [人名]-[能] 龍王-[定] 家-[位] 裸麦-[属] 種-[定] 盗む-[過]
 アツオは龍王の家から裸麦の種を盗みました。
- (4.1) ʼtə na ta ʼtə meʔ tciʔ ʼma-ŋgo ʼtsa la ʼŋdɔʔ gə ʰi dʒa: po-gə ʼko-nə ta
 それから 少しも経たないうちに 龍王-[能] 気づく-[接]
 ʼtsʰiʔ kʰa ʼza-nə ta
 怒る-[接]
 それから少しも経たないうちに龍王に気づかれて、龍王は怒って、
- (4.2) ʼʔa tsʰo ʼpʰa-la ʼtɕʰə ʰi gɛ ʰi doʔ ʰtciʔ-la ʰhʰu-zə reʔ
 [人名] あれ-[与] 犬 単独の-[位] 変身させる-[過]
 あのアツオを1匹の犬に変えました。

- (4.3) ʼte na ta ʼfi zə ʼfi daʔ-gə ʼkʰo-la ʼze:-nə ta
 それから 山神-[能] 3-[与] 言う-[接]
 それから山神が彼に言うには、
- (4.4) ʼtɕʰoʔ ʼpo mo ʰtɕiʔ-gə ʼtɕʰoʔ-la ʼma-ʼfi ga-na ʼtɕʰoʔ
 2 娘 一-[能] 2-[与] [否]-愛する-[接] 2
 ʼmə lu: ʼlo:-sʰa ʰka-sʰa reʔ ʼze:-zə reʔ
 人間の身 帰る-[名] 難しい-[可] 言う-[過]
 「お前は、1人の娘がお前を愛さなければ、お前が人間の身に帰ることは難しい
 だろう」と言いました。
- (5.1) ʼte na ta ʰsā mba ʼja: mo-la ʼle: ʼja: mo ʼjoʔ-nə ta
 それから 心 よい-[与] 縁 よい [存]-[接]
 それから、よい心にはよい縁があって、
- (5.2) ʼtə meʔ tɕiʔ ʼma-ʼgo ʼtsa la ʼtɕʰə ʼfi gɛ-ʼndə ʼsʰa ʼfi ne:-te-gə ʰpō mbo-gə
 少しも経たないうちに 犬-この 地域-[定]-[属] 領主-[属]
 ʼpo mo ʼndē wa ʼte:-gə ʼfi ga-nə ta
 娘 中間の それ-[能] 愛する-[接]
 少しも経たないうちに、この犬はその地域の領主の真ん中の娘が愛して、
- (5.3) ʼtə na ta ʼjō ʼleʔ ʼmə ʰreʔ-zə reʔ
 それから 再び 人 なる-[過]
 それから再び人になりました。
- (6.1) ʼtə na ta ʼmə ʼtsʰō ma-gə ʼsʰa wu:-tə ʼraʔ-tsʰa: ʰkaʔ-la
 それから 人 すべて-[能] 種-[定] 手に入れる-[達] とき-[位]
 それから、人々みなが種を手に入れたとき、
- (6.2) ʼte: ʼsʰa wu: ʰtaʔ-nə ʰzī ʼfi mo-nə ʰka le: ʰdzəʔ-nə ta
 それで 種 まく-[接] 畑 耕す-[接] 一生懸命働く-[接]
 それで、種をまき畑を耕し一生懸命働いて、
- (6.3) ʼtə nə ta ʰtsā mba ʼzī mbo ʼza-ʼfi dzu ʼraʔ-zə reʔ
 それから ツアンパ おいしい 食べる-[名] 手に入れる-[過]
 それからおいしいツアンパという食べものを手に入れました。
- (6.4) ʼtə na ta ʼkʰo tsʰo-gə ʰsā-nə ta ʼsʰa wu: ʼkʰo:-ʰkʰɛ-ʼndə
 それから 3.[複]-[能] 思う-[接] 種 持ってくる-[名]-これ
 ʼla-gə ʰtō-zə-gə ʼtɕʰə ʼfi gɛ-tə ʼreʔ ʰsā-zə reʔ
 神-[能] 送る-[過]-[属] 犬-[定] [判] 思う-[過]
 それから彼らが思うことには、「種をもってきたのは神が送った犬である」と
 思いました。

- (6.5) ʼka de ʼla-gə ʼtɕʰə^{fi}gɛ-tə ʼkʰɔʔ ʼma-fio:-zə ʼna
 もし 神-[能] 犬-[定] 連れる [否]-来る-[過] [接]
 ʼkʰo tsʰo ʼʔaⁿⁱda ʼh^{ts}ũ^mba ʼzĩ^mbo ʼza-^{fi}dzu
 3.[複] こんな ツアンパ おいしい 食べる-[名]
 ʼruʔ-ʼma reʔ ʼh^sũ-zə reʔ
 手に入れる-[状/否] 思う-[過]
 もしも神がその犬を連れてこなかったなら、彼らはこんなおいしいツアンパと
 いう食べものを手に入れてはいなかったと思いました。
- (6.6) ʼtə nə ta ʼta: wa: tə ʼpoʔ pa ʼhũⁿⁱ tɕeʔ ʼtɕʰə^{fi}gɛ-ta ʼn^{de}: wa
 それから 今まで チベット人 すべて 犬-[共] 関係
 ʒa: mo ʒoʔ-reʔ
 よい [存]
 それからこれまでチベット人はみな犬との良い関係をもち続けています。
- (6.7) ʼtə nə ta ʼhũⁿⁱ tɕeʔ-gə ʼtɕʰə^{fi}gɛ-tə-gə ʼni ma ʼ^{fi}na-la ʼh^{ts}ũ^mba
 それから みんな-[能] 犬-[定]-[能] 昔-[位] ツアンパ
 ʼkʰɔ:-zə reʔ ʼh^sũ-nə
 持ってくる-[過] 思う-[接]
 それからみんなはその犬が昔にツアンパを持ってきたと思い、
- (6.8) ʼtə nə ta ʼmə ʼtsʰɔ̃ ma ʼkʰo-la ʼhka tʰe: ʼze:-^{fi}dzu ʼtɕʰe tə
 それから 人 みんな 3-[与] ありがとう 言う-[名] ために
 それからみな人々がそれに「ありがとう」と言うために、
- (6.9) ʼlo ʼre re-la ʼnɛ: ʼh^tɕe:-tsʰa: ʼna ʼh^{ts}ũ^mba ʼh^sa: pa
 年 それぞれ-[位] 裸麦 収穫する-[達] [接] ツアンパ 新しい
 ʼza ʼhkaʔ-la
 食べる とき-[位]
 毎年裸麦の収穫を終えて、新しいツアンパを食べるとき、
- (6.10) ʼmə ʼtsʰɔ̃ ma-gə ʼtũ^mbo ʼh^{ts}ũ^mba ʼloʔ loʔ-tɕiʔ ʼ^{fi}dzə-nɛ:
 人 みんな-[能] まず ツアンパ団子-[不定] こねる-[接]
 ʼtɕʰə^{fi}gɛ-la ʼ^{fi}zi:-lə reʔ
 犬-[与] 与える-[未]
 人々はみな、まずツアンパ団子をこねて、犬にあげるのです。

2.2 翻訳：物語『裸麦の種子の由来』

むかしむかし、1人の王子がいました。彼は名前をアツォといいました。彼は賢く勇敢でもありました。また、善良な心を持っている人でした。すべての人にとって食べ物が手に入るように、彼は龍王の下へ、裸麦の種を求めに向かいました。

それから、彼は20人ほどの戦士を連れて、馬に乗って行きました。山を1つまた1つと越えました。川を1つまた1つとたくさん越えました。それから、路上で彼の戦士たちの何人かは毒蛇に噛まれて死にました。何人かは野獣に噛まれて食べられました。何人かはまた野人に殺されました。それから、99の山を越え、99の川をほとんど越えると、アツォ自身1人を除いて誰もいなくなりました。それから、彼自身少しも恐れることなく、先の方へ上へ行きました。

それから、アツォが龍王の住むところに着いたとき、龍王はアツォが裸麦の種を取りに来たと言ったことを承諾しませんでした。それから、アツォは方法がなくなって、それで、山神に「助けてください」と言いました。それから、山神が助けて、アツォは龍王の家から裸麦の種を盗みました。

それから少しも経たないうちに龍王に気づかれ、龍王は怒って、あのアツォを1匹の犬に変えました。それから山神が彼に、「お前は、1人の娘がお前を愛さなければ、お前が人間の身に帰ることは難しいだろう」と言いました。

それから、よい心にはよい縁があって、少しも経たないうちに、この犬はその地域の領主の真ん中の娘によって愛され、それから再び人になりました。

それから、人々がみな種を手に入れたとき、種をまいて畑を耕し一生懸命働いて、おいしいツアンパという食べものを手に入れました。それから彼らは「種をもってきたのは神が送った犬である」と思いました。もしも神がその犬を連れてこなかったなら、彼らはこんなおいしいツアンパという食べものを手に入れることはできませんでした。それから、これまでチベット人はみなその犬との良い関係をもち続けています。それから、みんなは犬が昔にツアンパを持ってきたと思い、人々がみな犬に「ありがとう」と言うために、毎年裸麦の収穫を終えて、新しいツアンパを食べるとき、人々はみなまずツアンパ団子をこねて、犬にあげるのです。

3 訳注

訳注は、まず全般的に現れる現象に関してははじめにまとめて述べ、続いて2節に示した文番号を指示して、それぞれについて与える。特筆すべき事例が見当たらない文番号の箇所については、記述を省略する。

なお、訳注で述べる現象は、先行する記述である鈴木・四郎翁姆(2016)を参照し、また適宜引用しつつ解説する。本稿で分析する物語は、同論文が記述する言語を話す世代層(青年層)によるものであるため、発音や文法構造が均質的であるという予測による。なお、鈴木ほか(2015)が扱う物語の話し手もまた同世代であることから、これらを参照することで見出される相違点は、およそ「人工的な語り」を特徴づける性格のものであるということが指摘できる。

全般について

この物語の発話では、各発話の最後に伝聞標識が現れないのが特徴的である。これはすなわち、この物語が口承で伝えられていないことを示唆している。聞き及んだことで、かつ自ら確認していない事柄については、伝聞標識を伴うのが通例である Lhagang 方言⁵にとって、文字情報によって内容を覚えた場合、伝聞標識が現れる傾向にないということを示唆している。これは、伝聞標識を含まない漢語を原文として参照していることとは関連がないと考える。本稿の語りは、語りのモードで発話されており、忠実な翻訳を行っているのではないからである。情報源が目で見えて確認した「確かなものである」という判断のもとでは、伝聞標識が付加されないと考える。

また、出来事の描写に当たっては一貫してアオリスト⁶が用いられ、目撃証拠性がかかわる完了形⁷は用いられない。状態の描写に当たっては判断動詞や存在動詞が用いられるため、時間、アスペクトに関する表示には制限がある⁸。このため、この物語は語りとして全体的に静的な印象を与える構造を示している。

これらの特徴は、おそらく人工的に創出された物語であるために際立っていると考える。口承で伝わった物語の語りでは、こういった特徴は認められない⁹。

(1.1)

^{/fi}dza: po ʔpu zə/は、その声調領域が示唆するように、2つの語^{/fi}dza: po/「王」と^{/ʔ}pu zə/「息子」を並列した複合語である。語と語の接続に属格標識は用いられない。

^{/fi}dza po/という語は、本稿では「王」と訳出しているが、Lhagang 方言では、歴史の文脈によって「領主」として用いられる。しかし、この物語には、別に^{/h}pö mbo/「領主」が登場する(5.2)。物語中では架空の王国を設定しているため、歴史の文脈とは異なる訳語を与えている。

不定標識^{/-teiʔ/}は、主部の名詞の不定性を表すことを第一目的として現れているわけではなく、しばしば語調を整える際に現れ、それが定/不定によって異なる語形をもつと考えることができる。いわゆる「不定冠詞」とは役割が異なる¹⁰。「1つ」を強調するときには、(4.4)にあるように独立の声調をもつ数詞「1」を用いる。さらに「1個体」を強調するときには、(4.2)にあるように^{/fi}doʔ hteiʔ/という形態を用いる。

⁵ 鈴木ほか (2015:125)、鈴木・四郎翁姆 (2016:73) 参照。

⁶ 鈴木・四郎翁姆 (2016:68-69) 参照。アオリストは「一般的に過去と呼ばれるカテゴリーに非常に近く、実際 Lhagang 方言の TAM 体系の中では「過去」と呼んでも差し支えない」(2016:68)。しかしながら、Lhagang 方言に時制としての「過去」が認められるかどうかは、詳しく検討する必要がある。

⁷ 鈴木・四郎翁姆 (2016:69-71) 参照。

⁸ 鈴木・四郎翁姆 (2016:51) 参照。

⁹ 鈴木ほか (2015) の分析を参照。

¹⁰ 鈴木・四郎翁姆 (2016:42) では、不定標識として^{/-ziʔ/}のみを挙げているが、「1」は名詞とともに用いられるとき、^{/-teiʔ/}という異形態をもつ」(2016:41) ともあり、これらの中間的な形態として^{/-teiʔ/}があると考えてよいだろう。

存在を表す動詞/ $\text{jo}^?-\text{re}^?$ /は、ひとかたまりで1つの存在動詞として扱う¹¹。

物語の設定は現在より過去におかれているが、動詞/ $\text{jo}^?-\text{re}^?$ /は通常 TAM 接辞を取らないため、/ $\text{ni ma}^{\text{f}}\text{na}^{\text{f}}\text{na}^{\text{f}}\text{-la}$ /「むかしむかし」という時間を表す表現が語りの時間設定を担っている。

(1.2)

/ $\text{ze}^{\text{h}}-\text{re}^?$ /は、「言う」という動詞に習慣/判断を示す判断動詞と同形態の TAM 要素がついている¹²。物語を語るうえで、この習慣/判断を表す TAM 接辞は状態の表現に用いられる。

(1.3)

/ $\text{k}^{\text{h}}\text{e}:\text{pa}$ /「賢い」は形容詞で、述語の一部になっている。これに/ $\text{-tci}^?$ /が付加されているが、これは数詞「1」と関連があるものの、数詞ではなく、また語りにおいては独立した声調領域を形成しないことから、不定標識であると考え¹³。

/ $\text{ji}^{\text{h}}-\text{re}^?$ /は、2つの判断動詞の語幹が連続した形式である¹⁴。これは(1.5)に現れる判断動詞と交換できるが、(1.4)に現れる判断動詞とは交換できない。動詞に先行する/ $\text{-tci}^?$ /の有無による可能性があるが、子細に検討する余地がある。

(1.4)

形容詞/ $\text{hpo}:\text{pa}^{\text{h}}\text{-t}^{\text{h}}\text{e}$ /「勇敢な」は、2つの声調領域をもつ複合語と解釈する。最終音節の/ $\text{-t}^{\text{h}}\text{e}$ /は、単独で「大きい」の意味である。

(1.6)

/ $\text{t}^{\text{h}}\text{e t}\text{a}$ /に先行するのは名詞句である必要がある。(6.8) 参照。ただし、TAM 接辞がついた動詞に名詞化接辞はつかないようであり、TAM 接辞の後ろに属格が現れている¹⁵。/ $\text{-}^{\text{f}}\text{go}$ /はそれ自体名詞化標識として機能しないと考える。

動詞「得る」の受け取り手(受益者)は位格で表示される。この格は脱落可能であるため、文法格の中の与格とは異なる。

¹¹ 鈴木・四郎翁姆 (2016:53-56) 参照。

¹² 鈴木・四郎翁姆 (2016:65-67) 参照。

¹³ 鈴木・四郎翁姆 (2016:57-58) では、形容詞に後続するこの要素を独立の声調をもつ数詞と解釈しているが、おそらく自然発話および語りにおいては、もはや先行する形容詞と同一の声調領域内に含まれた接辞であると考えるのが妥当である。これにより、/ $\text{-tci}^?$ /は鈴木・四郎翁姆 (2016:42) に記述のある不定標識/ $\text{-zi}^?$ /の異形態と考える。

¹⁴ 鈴木・四郎翁姆 (2016:52) では、この形式には「当然であるという含意がある」とする。

¹⁵ 格標識は、通常名詞句に付加すると考えるが、鈴木・四郎翁姆 (2016) は動詞句への付加について記述していない。しかし、チベット系諸言語では、格標識は動詞句にも付加され、接続詞の役割を果たす (Tournadre 2010)。本稿 (6.10) などを参照。

(1.7)

/^hqu? gə ^hdza: po/は、2つの語/^hqu?/「龍」と/^hdza: po/「王」が属格で結ばれてできている複合語である。(1.1)にある「王の息子」と異なり、この複合語には属格標識が現れている。これは、複合語の第1要素が1音節語であることと関連がある。

名詞「龍王」に後続するのは/^hzə k^ha/「そば」という位置名詞¹⁶であり、直前の名詞に属格を要求せず、また位格なしに場所を示しうが、ここでは独立した声調をもつ。位置名詞が独立した声調をもつかどうかは、その形態的特徴とともに、文中での意味も関係している。特に複音節からなる位置名詞は、概して独立の声調をもつ。

動詞/^hs^hō, ^hs^ho/(文中では接尾辞があるため/^hs^hō-/となる)は、通常命令形で用いられる¹⁷が、過去の文脈において用いられる場合については、「描写で設定される地点より離れる」すなわち「去る」の意味で理解される。この時点で王子は自分の国に戻ってくることが想定されていないとも解釈できる。

物語の中で文と文をつなぐ接続語¹⁸には多くの音形が認められ、/-ta/や/-nə/、/-nə ta/などは、直接動詞に付加され、動詞の声調領域に取り込まれている。この形態素の直前の動詞は基本的に語幹のみであり、接尾辞類を取らない。TAM 関連は文末をしめくくる動詞が表示する。

文末に現れる/-zə re?/は、語源を考えれば、アオリスト標識/-zə/と判断動詞/^hre?/からなる。しかし、このように分析的に語釈をつけるのは、共時的な特性を必ずしも反映するものではないため、/-zə re?/をひとかたまりにして扱う¹⁹。

(2.1)

冒頭の/^hte na ta/は、この語りにおいて頻繁に繰り返される語で、「それから、それで」と訳せるものである。/^hte nə ta/、/^htə nə ta/という音形も認められる。

/^hma: mi/は「戦士」と訳してあるが、「軍人、軍隊」という原義のほか、現代語の文脈では「警察」にも用いられる。Lhagang 方言の本来語であると考えるが、音形上は文語音の様相を呈している。

数詞に後続する/-zə/は大きい数に付加され、概数を表す²⁰。

¹⁶ 鈴木・四郎翁姆 (2016:40) 参照。

¹⁷ 鈴木・四郎翁姆 (2016:56) 参照。

¹⁸ 鈴木・四郎翁姆 (2016:83) に/nə/という形式についての解説があるが、「接続語」という範疇は認めていない。語りにおいては、/nə/以外にも多くの形態が文と文の接続の役割を担い、かつ独立した声調をもたないことから、これらの形態をまとめて「接続語」と呼ぶことにした。

¹⁹ 関連する記述は鈴木・四郎翁姆 (2016:61-71, 84) 参照。

²⁰ 鈴木・四郎翁姆 (2016) に記載がない用法である。たいていは「20」以上のきりのいい数に付加される。

(2.2)

/kə tsa/は時間的な「後」という意味で用いられるが、ここでは動詞「越える」がこの語の前に省略されていると解釈し、「越えたのちに超える」という意味を表しているものと理解する。

(2.3)

/kə tsa/については、直前の (2.2) を参照。

不定を表す/-tci?/は後置される修飾語に付加され、名詞句であることを表すときにも用いられ、必ずしも不定を表さない²¹。

(2.4)

この文においては、被動者「戦士」が行為者「毒蛇」より前に来る語順を取り、両項とも有生生物であるため、行為者には強調の意味がなくても能格標識が必要とされる²²。和訳には受け身を当てている。

文末には2つの動詞「噛む」と「死ぬ」があり、接続語/-nə/で結ばれているが、後者は1項動詞で、「戦士」がその項に該当する。このような動詞の配列の場合、「毒蛇」が「戦士」よりも前に現れることはできないという。これが統語的制約によるものであるか、語用論的な現象であるかは、子細に検討する余地がある。

(2.5)

この文も (2.4) と同様、被動者「いくらか(戦士)」が行為者「野獣」に先行しているため、行為者に能格標識が現れる。

動詞も同様に2つ存在するが、いずれも2項動詞で、要求する格も変わらないため、いずれも和訳には受け身を当てている。

(2.6)

この文も (2.4, 2.5) と同様、被動者「いくらか(戦士)」が行為者「野人」に先行しているため、行為者に能格標識が現れる。

(2.8)

/^hka?-la/「～の時に」の直前の動詞には TAM 接辞類がつかなくてもよい。ここでは「越え終わった」と到達したことを強調するために/-ts^ha:/が現れていると解釈する。

²¹ 鈴木・四郎翁姆 (2016:57-58) で記述があるのは、述部を形成する形容詞に付加される場合のみであり、名詞句であることを表す場合に使用される例は、当該箇所 (2016:49-50) を見ても記述がないが、不定標識 (2016:42) の記述にある例に相当する。本稿の (1.3) の訳注も参照。

²² 鈴木・四郎翁姆 (2016:45) 参照。

(2.9)

/mə ts^he/「以外」を用いて「～以外～しない」という意味を表す場合、文末の動詞は語幹に否定辞がつく。形態論上 /lɑ:-zə^h ma-reʔ/ が通例である²³ が、ここでは /ma-lɑ:-zə reʔ/ という、TAM 接辞群に含まれる判断動詞に否定辞がつかない構造のみが許容される。

(2.10)

/rɔ:/「自身」は、ここでは独立した声調をもっているが、/k^ho-rɔ:/という接尾辞の形式になる場合も認められる。

最後の動詞 /^hqo-/「行く」は、(1.7, 2.1) のように /s^hɔ/「去る」ではない。(2.2) から (2.9) までの道のりを越えたということから、描写の地点に戻ってくる可能性が高いと語り手が判断したからである。

/tə meʔ tciʔ/「少し」は、ここでは後続の否定辞とともに「少しも～ない」のように、否定の徹底性を意味している。

(3.1)

名詞「龍王」につく格標識は、能格ではなく属格であり、後続の /^hdoʔ-s^ha/「住むところ」にかかっている。動詞 /^hdoʔ/ は通常能格をとらないからである。

名詞化接辞 /-s^ha/ は、これ自体で位置名詞を形成することもでき、位格標識をとらなくても、文が成立する。

(3.2)

この文には2度「言う」が現れる。最初の「言う」には属格標識がついており、次の「言う」の名詞化した形式を修飾している。そして、/ze:/「言う」に囲まれた部分がアツォ王子のセリフであると解釈する。ただし、3人称代名詞が現れているように、完全な直接引用ではない²⁴。全体の直訳としては、「アツォ王子が言った、『～』と言ったこと」というように、「言う」が重複している。しかし、語りで引用を挟む場合には、引用の始めに動詞「言う」を置くことの方が通例であるようで、このような構成は不自然ではないと考える。同様のことが (4.3)-(4.4) にかけても現れる。

最初の「言う」には、語幹にアオリストの接辞がついて過去であることを明示したのちに属格標識がついている。属格は、被修飾語に前置された関係節を修飾節にするときに任意で付加できる要素である²⁵。格標識に先行するが名詞句であると考えれば、アオリストの接辞は名詞化接辞と解釈できる。(6.4) 参照。

「龍王」の能格標識は、この文の最後の動詞 /k^hɛ: 1e:/「承諾する」とつながっている。なお、

²³ 鈴木・四郎翁姆 (2016:68) 参照。

²⁴ 類似の構文が鈴木ほか (2015) にも認められる。

²⁵ 鈴木・四郎翁姆 (2016:50) には、属格標識を伴わない例のみが記述されている。

この動詞は2つの語で1かたまりとなる語であるが、動詞語幹は第2音節部分であり、接辞類はすべて第2音節側に付加される。

(3.3)

「アツォ」に付加される格標識は、属格か能格か、文構造の解釈の仕方によって、2通りに分かれる。テキストの語釈に示したのは、能格ではなく属格であるとの解釈で、後続の「方法」を修飾している。動詞/^hmeʔ/が存在動詞であるため、能格は取りえないからである。もう1つの解釈は、「アツォ」は(3.4)の最後の動詞「言う」の行為者で、能格であるというものである。(3.4)には行為者が現れていないため、このような解釈もまた許容される。

(3.4)

/^hroʔ pa ^{hi}zo-roʔ/「助けてください」はアツォのセリフであると解釈する。/-roʔ/は丁寧な依頼を表す助辞²⁶である。/^hroʔ pa ^{hi}zo/²⁷は1かたまりで動詞となっていると考える。

(3.6)

「盗む」について、和訳では「龍王の家から盗む」としているが、表現方法に従えば「龍王の家で盗みをはたらく」という構造になっている。

(4.1)

/^htə meʔ tciʔ ^hma-^hgo ^htsa la/「少しも経たないうちに」は、厳密には/^htə meʔ tciʔ/, /^hma-^hgo/, /^htsa la/と分けられ、それぞれ「少し」、「[否]-過ぎる」、「後」と語釈を与えられるが、ここでは便宜上1まとまりの時間を表す句として解釈している。

動詞/^hko/は「気づく」の意味で行為者を能格で標示することができる。「分かる」の意味では能格はとらないのが通例であるが、(4.4)にもあるように、語りの中では能格の用法が自然発話に基づく記述と若干異なっている可能性もある。

(4.2)

人名に指示詞がつく場合がある。この場合、和訳にあるような「あの～」というニュアンスを与える。

/^{hi}doʔ ^htciʔ/は「1個体」であることを強調するとき用いる。形態論上は数詞とはいえないが、意味的には数詞「1」の代わりにしていると考えられる。

動詞/^htɕu/「変身させる」は、「ある人/ものを全く異なる別の人/ものに変える」という意味で用いられる。

²⁶ 鈴木・四郎翁姆 (2016:72) 参照。

²⁷ この動詞の第3音節/^{hi}zo/は、本来/^{hi}zu/「する」であると考えられる。先行する音節の母音に影響を受けて/o/になったのではないかと推測する。

(4.3)

(3.2)と同様に、「言う」はこの文末とともに、(4.4)の文末にも現れ、繰り返されている。

(4.4)

文頭の2人称代名詞は、後続の文の中に適切な位置が見つからないため、主題化され単独の要素となっていると理解する。

$\wedge po mo \ ^h t \ e i \ ? - g \ a /$ 「1人の娘」の能格標識は $\wedge \bar{f} i \ g a /$ 「愛する」の行為者を示す。通常の会話においては、「愛する」などの感情動詞について、感情の抱き手が能格標識を伴うことはないとみられる²⁸。(5.2)にも同様の例が認められる。文脈に沿って考えると、「愛するようになる」という、単なる感情を表現する以外に状態変化の意味がある可能性があるが、現段階ではこの能格標示は語りの中でのみ有効なものであると考える。

接続語 $\wedge - n a /$ は、(6.5)や(6.9)のように、通常独立した声調をもつが、ここでは声調をもたない形で現れている。

動詞 $\wedge l o /$ 「戻る」は1項動詞であると理解する。しかしここでは絶対格で2項とっているように見える。 $\wedge m \ a \ l u /$ 「人間の身」は位格におかれていると考え、位格標識が脱落したものと考える。

(5.1)

文末の動詞 $\wedge j o \ ? /$ には、文脈上 $\wedge j o \ ? - r e \ ? /$ と出てくるべきところが、 $\wedge - n \ a \ t a /$ 「～て」があるため、すべてのTAM接辞部分が示されなくなっている。(1.7)参照。一方この現象は、存在動詞 $\wedge j o \ ? - r e \ ? /$ が1かたまりの存在動詞として成立しておらず、分析可能であるという1つの証拠になっていると考えることができる²⁹。

(5.2)

動詞「愛する」の直前にある $\wedge - g \ a /$ は、(4.4)と同様に能格標識であると考え、「領主の真ん中の娘によって愛される」に近いニュアンスがある。「愛する」対象は「犬」であるが、与格が現れていないのは通常の文構造から考えればほぼありえない。まず、「犬」が先に発話に現れているのは、主題標識を伴っていないものの、主題化と考えられる。ところがこのとき、話者の頭の中に文末の動詞が「愛する」であるということが思い浮かんでいなかった可能性がある。もしかすると、語りの筋書きを瞬間的に忘れたか、内容が混乱した可能性も指摘できる。というのも、流布しているいずれの版においても、「真ん中の娘」に愛されるという筋書きは存在しない

²⁸ 鈴木・四郎翁姆 (2016:46) 参照。

²⁹ 鈴木・四郎翁姆 (2016:53-56) 参照。動詞に後続する諸要素について、分析的に語釈を与えるか、ひとかたまりとして語釈を与えるか、判断の難しい部分である。

からである³⁰。

(5.3)

動詞/ˈreʔ/「なる」は判断動詞と同一の形態であるが、TAM 接辞が付加できる点で判断動詞とは異なる。

(6.2)

この文の行為者は、(6.1) に現れる/ˈməʔtsʰõ ma/「人々みんな」である。また、いずれの動詞も TAM 接辞群を伴っておらず、文がまだ続いていくことを示している。

文頭の接続詞/ˈte:/は、周りが/ˈtə na ta/であるのと比べれば、形態に異なりがあるが、語りにおける接続語句は、文の切れ目を表す場合もあればフィラーの一種である可能性もあり、固定された語ではなく、いくつかの形態が認められるものと言ってよいだろう。

この文に現れる/ˈsʰa wu:/「種」は他と異なり、下降調で現れる。後続語との声調の対比のために現れる韻律的特徴として理解する。Lhagang 方言に文法上有意な声調交替は認められない。

(6.3)

この文の行為者もまた、(6.1) に現れる/ˈməʔtsʰõ ma/「人々みんな」である。

この文では、/ˈhʰtsã mba ˈzĩ mbo/「おいしいツアンパ」と/ˈza-ʰdʒu/「食べ物」は、「おいしいツアンパを食べること」という名詞句の読みではなく、「おいしいツアンパという食べ物」のように同格であると解釈しなければ文意が通らない。(6.5) にも同様の例が出てくる。

(6.4)

動詞/ˈhʰsã/「思う」が、(3.2), (4.3)-(4.4) における「言う」と同様に、引用文の前後に2度出てくる。これが引用文の前後の構造であると考えられる。

動詞「送る」には、(3.2) と同様、語幹にアオリストの接辞がついて過去であることを明示したのちに属格標識がついている。

動詞/ˈkʰɔ:/「持ってくる」は、(6.5) にあるように/ˈkʰɔʔ/となる場合がある³¹。より正確な語義は「手を用いずに持ってくる」であり、「手を用いて持ってくる」と区別される。「犬」は擬人化されていないようである³²。

³⁰ 西藏文化網版では、単に「3人姉妹」となっている。第2著者が参照していない君島 (2013) では「3人姉妹の末娘」となっている。

³¹ このような現象については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015a) の記述を参照。また、具体例については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015b) の Lhagang-A および Lhagang-B の語彙を参照。

³² 君島 (2013) では、犬は首に種の入った袋を身につけていることになっている。この動作は、Lhagang 方言では/ˈkʰɔ:/で表される。

(6.5)

文頭の /ka de/ は文語で用いられる形式であるが、語りの中でも用いられる。

ʌʔa^hda/ 「このような」は /^htsā^hmba/ 「ツァンパ」を修飾する。

(6.6)

この文は所有構文をとるはずであるが、所有者である /poʔ pa^h t̃eʔ/ 「チベット人みな」には標示されるべき与格³³が現れていない。脱落しているものと理解せざるを得ない。もしくは、発話時には動詞が存在動詞となるとは考えていなかったなどの理由もあるだろう。

名詞 /^hde: wa/ 「関係」は関係がある対象となる名詞に共格標識を要求する。存在動詞が /^hjoʔ-reʔ/ であるため、この発話内容は直接観察した知識によるのではなく、常識的判断として述べられている。

(6.7)

名詞 /^ht̃eʔ/ 「みんな」に付加されている能格標識は、文末の動詞 /^hsā/ 「思う」の行為者を示しており、名詞句 /t̃eʔ^hg̃ε-tə/ 「その犬」に付加されている能格標識は、動詞 /^hko:/ 「持つてくる」の行為者を示している。

(6.8)

ここでの /^hka t̃e:/ 「ありがとう」は直接引用とも間接引用とも解釈できる。発言内容が短ければ、動詞「言う」などを引用の前後で繰り返す必要がないのかもしれない。

ʌt̃e^hε tə/ 「～のために」は、(1.6) で出てきたときには直前の動詞句に属格標識がついていたが、ここではそれが存在しない。

(6.9)

この文中に現れる /na/ は条件を表すものではなく、単なる接続語として機能しているように見える。ただし、独自の高声調を担う。

(6.10)

ここに現れる /-t̃eʔ/ は「1つ」という意味でもなく、かといって先行する語が形容詞でもないが、文の構成に必要とされるようである。総称を表している可能性もあるが、Lhagang 方言においてこのような用法が一般的であるとはいえない³⁴。

/-ne:/ は接続語と解釈しているが、奪格標識と同一の形態で、「～してから」という順序を表している³⁵。

³³ 鈴木・四郎翁姆 (2016:46, 54) 参照。

³⁴ 鈴木・四郎翁姆 (2016) には記載がない。詳細な調査が必要である。

³⁵ 格標識と接続語の関係については、Tournadre (2010) を参照。

最後の動詞には/-lə reʔ/という未完了の TAM 接辞がついているが、これは反復行為を表すときに用いられるもので、未完了アスペクトが表現されているものと理解する。

4 まとめ

本稿では、カムチベット語 Lhagang 方言による物語『裸麦の種子の由来』の記述言語学的分析と訳注を行った。この物語は Lhagang 方言の口承には存在せず、文字化された内容を基に、Lhagang 方言による翻案を通じてどのような言語特徴が現れるのかを見た。特徴的な点としては、語りの全体において伝聞標識が用いられないこと、過去を表す TAM 接辞群が一貫してアオリストであることなどが認められた。また、能格の用法において通常の会話では現れないパターンが存在することが分かった。

付録：Lhagang 方言の音体系とその表記

・音節構造

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

${}^c C_1 GVC$

このうち C_1 （初頭主子音）と V （音節核の母音）が必須であり、 $C_1 V$ を音節の最小構成とみなすことができる。

・子音

主子音（ C_1 ）位置に現れる要素の一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前 後	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	t^h		k^h	
	無声無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts^h		$tʃ^h$		
	無声無気		ts		$tʃ$		
	有声		dz		$dʒ$		
摩擦音	無声有気		s^h		$ʃ^h$		
	無声無気	ϕ	s	$\ʃ$	$ʃ$	x	h
	有声		z		$ʒ$	γ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m°	n°		ɲ°	ŋ°	
流音	有声		l	r			
	無声		l°				
半母音	有声	w			j		

・母音

舌位置による一覧は次のようである。

i	ɯ	ʊ u
e	ə	o
ɛ	ɔ	
a	ɑ	

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している

・超分節音素

語単位における次のピッチパターンが認められる。

ˉ: 高平	ˊ: 上昇	ˋ: 下降	ˆ: 上昇下降
-------	-------	-------	---------

略号一覧

文法機能語で略号を作らないものは直接 [] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。

2	2 人称	[判]	判断動詞
3	3 人称	[存]	存在動詞
[能]	能格	[幹]	動詞語幹
[与]	与格	[未]	未完了
[属]	属格	[必]	必要未来
[位]	位格	[過]	アオリスト
[名]	名詞化標識	[達]	達成
[定]	定標識	[否]	否定辞
[不定]	不定標識	[接]	接続語
[概]	概数標識		

参考文献

賈芝、孫劍冰編 (1964) 「犬になった王子」『黒いりゅう 白いりゅう』(君島久子 訳) 岩波書店 (原版 青稞種子的來歴 賈芝、孫劍冰編《中国民間故事選 第一集》1958年、人民文學出版社)

君島久子 (2013) 『犬になった王子』 岩波書店

鈴木博之、四郎翁姆 (2016) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』 8, 21-90

電子版: <https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集> (2017年4月4日閲覧)

- 鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』 訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編 『地球研言語記述論集』 7, 111-140
電子版 : <https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集> (2017年4月4日閲覧)
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153-175.
電子版 : http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_32_05.pdf (2016年12月18日閲覧)
- (2015b) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245-286.
電子版 : <http://hdl.handle.net/10108/85072> (2016年12月5日閲覧)
- Tournadre, Nicolas (2010) The Classical Tibetan cases and their transcategoriality: From sacred grammar to modern linguistics. *Himalayan Linguistics* 9.2: 87-125.
電子版 : <http://escholarship.org/uc/item/94d0447c> (2016年12月5日閲覧)
- Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263.
- 中央民族學院少数民族語言文學系藏語文教研室藏族小組 編 (1980) 《藏族民間故事選》上海文藝出版社

Origin of highland barley's seeds, adapted and narrated in Lhagang Tibetan
—text, annotation, and analysis of narration mode—

Hiroyuki SUZUKI

Sonam Wangmo

abstract

This article presents a story named *Origin of highland barley's seeds* narrated in the Lhagang dialect of Minyag Rabgang Khams Tibetan with linguistic glossing, translation, and annotation. This story is not transmitted in the speech community of Lhagang Tibetan, but well known as one of the Tibetan traditional oral stories in Chinese, circulated as a part of books as well as online articles. The present version is artificially composed: after memorising several Chinese versions, the second author, native speaker of Lhagang Tibetan, narrated without referring to the Chinese text. Therefore, it is of an experimental nature as a linguistic material and we will examine how the narrative style has been influenced by the translation process other than a general analysis of a narrative.

The analysis shows that:

- this narrative version lacks a hearsay marker, probably because it is not orally transmitted;
- aorist is a default TAM marker in the narrative; and,
- irregular use of the ergative marker is attested.

受理日 2017 年 4 月 4 日